

演劇による人づくり・まちづくり

八雲国際演劇祭の取り組み

三年に一度、日本最小の公立劇場で開催される国際演劇祭がある。
一九九九年度のプレ大会を含めると六回を数えた「八雲国際演劇祭」が、
中山間地でのまちづくりにどんな役割を果たしてきたのかをレポートする。



松江市産業観光部観光文化課
文化係長
真野 啓子

演劇祭のはじまり、挑戦

八雲国際演劇祭は、三年に一度の開催として、二〇一四年、第五回が開催された。第一回は二〇〇一年度であるが、プレ大会として実験的に一九九九年度に開催したのがはじめてである。地域住民、認定NPO法人あしぶえ、行政で組織した実行委員会（事務局は「あしぶえ」）により、「演劇文化による人づくり、まちづくり」を目的に開催してきている。

主会場は、松江市八雲林間劇場、通称「しいの実シアター」である。ここは、客席一〇八席という日本最小の公立劇場である。

まの・けいこ

一九六七年島根県松江市生まれ。一九九一年松江市役所入庁、一九九八年から観光文化課に三年在職。障がい者福祉、住宅政策関係等所管を経て二〇〇九年から現職。

り、名称のとおり、豊かな自然に囲まれた穏やかな農村にある。現在、指定管理者として、シアターを管理している「あしぶえ」（シアター建設当時は任意団体）が劇場建設をめざしていた頃、八雲村（現松江市八雲町）との出会いにより公立劇場として建設が実現した。「あしぶえ」自らが集めた資金も村に寄付するとともに計画に参画してきた。

八雲村は、旧松江市のベッドタウンとして隣接地域を中心に宅地開発が進む一方、中山間地域としての魅力にあふれ、田舎ぐらしを実現するU/Iターナー者が多い地域でもあった。村の行政にも、村外からの人材の受け入れにより、地域を活性化させていこうという積極的な意思もあつての劇場建設、「あしぶえ」の受け入れであつたらうと考える。

このような流れのなかで一九九九年度にプレ大会が行われた。

前述のシアターの立地から想像に難くないところであるが、シアターへの移動手段、周辺の宿泊、飲食などの施設が十分でないなど、山積する課題を、「あしづえ」、地域住民、行政で解決していった。完全無償の住民ボランティアが、演劇上演のサポート、来場者の輸送、仮設レストランの運営、参加劇団員のホームステイによる受け入れ、国際交流などの知恵を絞る、自らの演劇祭として育ててきた。また、演劇公演は、海外の参加劇団が日本までの旅費負担をすることが標準とされるコンテスト方式でスタートした。これも限られた予算のなかで演劇祭を実現する工夫であった。

こうした取り組みは、住民自らの自信と誇りになるだけでなく、演劇への興味・関心も高め、地域の活性化に寄与してきた。

合併後の演劇祭の行方

二〇〇五年三月、八雲村を含む旧八束郡の七町村と旧松江市が市町村合併し、新松江市が誕生した。合併の二年後、第三回の演劇祭が行われた。八雲支所は別として、合併前の「役場をあげて」という空気は一変した。広くなった市域、とくに職員のみでの認知度も低く、一地域の催しとして扱われかねない状況もあった。せつかくここまで育った演劇祭、培われてきたボランティアの力。救いとなったのは「協働」というテーマのもと、人事課が開催した職員研修であった。その素材として演



続々とやってくる観客たち

われること、施設などの不足を補う以上のホスピタリティにあふれていることがあげられる。演劇とそれ以外の楽しさ、心地よさを、来場者、参加劇団、ボランティアが同じように感じていることだと言える。地方では触れる機会が稀な海外の演劇を見ることだけが、この演劇祭ではないのである。非日常性や居心地のよさを感じさせる演劇祭のさまざまな要素に触れるため、参加するために人びとは訪れるのである。中心部のホールでは得られないものなのである。

づくり・人づくりの取り組みを、八雲から全市へ広げてほしいと願うことは当然の思いである。このため、演劇祭の開催会場に市中心部のホールなどを加えられないかという打診を過去には度々行ったこともあった。

一方で、この演劇祭の魅力について考えたとき、何よりも日常を離れた自然のなかで行

演劇祭は取り上げられ、講師として招かれた実行委員会の委員長は、演劇祭への熱い思いを職員に語りかけた。私も、この時をはじめて演劇祭の様子を知ったと言ってもいいくらいである。その後、二〇一〇年度の第四回、二〇一四年度の第五回を所管課として関わることになった。演劇祭ということでは、所管は観光文化課にあるが、一所属で解決できることは少ない。国際交流、学校教育、シアター環境整備（シアターの所管は当課ではない）、地域振興など関係課は多岐にわたる。研修により職員に演劇祭の理念を伝える機会を得たことは大きかった。しかし、実行委員会に参画する市側の構成は、第三回、四回、五回と異なってきた。事務局の「あしづえ」にとっても、市側にとっても試行錯誤は続いているのである。

演劇祭の魅力はどこに

さて、市としては、地域住民やNPOが主体となつて行政とともに進めてきた地域活性化、地域



手作りの看板とエプロン姿のボランティア

第四回の演劇公演は、コンテスト公演だけではなく、「三歳から楽しめる演劇祭」の実現をめざして、ファミリー公演、特別公演として招聘した作品も加わった。そして、第五回では「演劇はこのころの食べもの」という観点に立ち、優れた作品を招聘・上演するよう、コンテスト方式からの転換がはかられた。第五回の六カ国一五集団一八作品のなかでは、南アフリカの作品が英語上演で、あとは、日本語、非言語、多言語によるものであったため、観劇のしやすさ、親しみやすさが格段に向上することになった。

演劇祭を核とした広がり

交流人口の増加という視点では、第五回の演劇祭では、「海と山のマルシェ」が同時開催された。この催しは、若年層で組織された実行委員会により実施されたものであるが、演劇祭の開催趣旨に賛同し、はじめて八雲で開催された。

「演劇はこのころの食べもの」に対して「カラダの食



会場の案内などもボランティアが活躍

べもの」を提供するマルシェには、安心して食べられるもの、手作りの品々が並び、楽しいパフォーマンスで賑わった。雨天の日があつたにも関わらず、これはじめてのマルシェに七〇〇〇人もの来場者があり、マルシェ目当ての来場者が演劇祭の存在を知り、当日券を購入しての観劇につながったケースも多かったと聞く。

実は、演劇祭開催直前になって、マルシェ側の来場者予測が飛

躍的に増加し、演

劇祭側もマルシェ側も駐車場、シャトルバスでの輸送計画の再検討を迫られる場面もあつた。マルシェ側の情報はチラシのほかフェイスブックなどが主で、演劇祭の情報の受け手とは大きく違っていたのである。屋外であつたマルシェは、雨天で中



第5回は6カ国15集団が参加

た。

次回への挑戦 共創

第六回は二〇一七年度の予定であり、これまでであれば、開催年までの二年間は、準備期間として海外劇団との交渉などに充てられていたはずである。しかし、実行委員会は、第六回にむけた試行的な取り組みとして、今年、ミニ演劇祭の開催を考えている。

また、市民やNPO法人との連携も松江市では「協働」から「共創」に変わり、その考え方などが、二〇一四年五月に立ち上げられた「共創のまちづくり推進本部」で議論されてきた。

同年一月の本部会議では、本市における「共創」の考え方の五つの特徴・ポイント(案)が以下のように示された。①市民とゼロベースから議論、日常のおつきあいを大事にパートナー関係づくり、②課題、弱みをプラスに変える逆転の発想、③危機感を共有し、二〇年後を見据えた取り組み、④ふるさと松江への愛、誇りが原動力、⑤松江の資源を生かした「おもてなし」力向上のまちづくり——どれもがこれまでの演劇祭に当てはまるものであつた。

その後の本部会議では、⑦自立・持続した地域、まちづくりをめざす、⑧松江市にある自然歴史文化などの地域資源を発見、磨く、活用する、⑨市民ひとりひとりの力、人材、ネットワー

止となった日もあつたが、情報の即時性により大きな混乱もなく開催された。本当に、これまでになく若い家族連れが多く見られる演劇祭となった。

ボランティア経験の蓄積

さらに、第五回の演劇祭では一四年間五回以上活動したボランティア三二名に大会長の市長から表彰状が贈られた。これは、中学生から七〇代までの三二〇名のボランティアの一割に当たるが、四回以上の経験者も二四名いるとのこと。ボランティアは異なる職業や環境、年代であり、考え方や仕事の進め方に違いがある。対話を重ね、振り返りと改善を繰り返し、今に至っている。このプロセスが、日常の仕事や地域活動でも生かされているとも聞いている。着実に人は育つてきているのだと感じる。また、若い人の参加が見られるのも嬉しいことである。ある意味、演劇祭の主役はボランティアであつ



国旗を掲げて入場するブルガリアの劇団

クを活かしたまちづくり——も重要とされた。まだまだ「共創」という言葉が身近なものにはなっていないが、それぞれ、具体化した取り組みを知ること、職員一人ひとりも納得できる「共創のまちづくりのイメージ」が持てるよう、市のなかですっかり議論されているところである。

最後に

私が、はじめて観劇のために駐車場からシアターへのシャトルバス(マイクロバス)に乗った時のこと。ボランティアの運転手さんが、同乗していた知人に、「もう何回も運転の手伝いに来てくれるけど、演劇は見たことないね」と言うのを聞いた。その時は、ローテーションが厳しくて、観劇の時間が割けないことへの不満と感じてしまったが、回を重ねるなかで、ボランティアの方を見ていると、その言葉は不満や残念な気持ちではなく、自らの役割を果たすことにより、この演劇祭を支えているという誇りのように感じられてきた。そのように感じるようになったのも、多くのボランティアの笑顔と自信に触れたためかもしれない。実際に行かないと気付かない。これが八雲国際演劇祭の魅力なのだろう。